

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K07	氏 名	宇野 直人
研究主題 —副主題—	非連続型テキストを含む説明的な文章の指導の開発		
所属校	八王子市立美山小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項 目	内 容																											
I 研究の目的	P I S A調査において、我が国の児童・生徒の読解力に低下が指摘されてきた。全体的には正答率は持ちなおしてきたものの、連続型テキストと非連続型テキストを組み合わせた混成型テキストの読解力については、2009 年度まで下降が続いている。*1 <table><tr><td></td><td>2000 年</td><td>2009 年</td></tr><tr><td>連 続 型</td><td>65.0%</td><td>63.7%</td></tr><tr><td>非連続型</td><td>70.0%</td><td>64.4%</td></tr></table> 混成型テキストの正答率 <table><tr><td>2000 年</td><td>2003 年</td><td>2006 年</td><td>2009 年</td></tr><tr><td>67.1%</td><td>65.3%</td><td>63.3%</td><td>63.1%</td></tr></table> また、2012 年の結果を見ると、全体的な読解力は向上している傾向が表れてはいるが、混成型テキストの読解については、他の形式の問題の結果よりも十分に向上しているとは言いがたい結果であった。*2 混成型テキストのプロセス別正答率（2012 年） <table><tr><td>プロセス</td><td>1.1情報の取り出し</td><td>1.2 統合・解釈</td><td>4.3 統合・解釈</td><td>13.2 統合・解釈</td></tr><tr><td>正答率</td><td>55.2%</td><td>57.1%</td><td>50.8%</td><td>33.2%</td></tr></table> 混成型テキストの読解の面での課題とともに、2009 年までの P I S Aの読解力調査結果から、情報相互の関係性を理解して解釈する「統合・解釈」が苦手であると指摘された。 混成型テキストの読解力を向上させるためには、連続型テキストと非連続型テキストの関連に着目させ、それぞれの情報のつながりを重視した学習指導が必要である。本研究はそのための説明的な文章の指導の開発をねらいとする。		2000 年	2009 年	連 続 型	65.0%	63.7%	非連続型	70.0%	64.4%	2000 年	2003 年	2006 年	2009 年	67.1%	65.3%	63.3%	63.1%	プロセス	1.1情報の取り出し	1.2 統合・解釈	4.3 統合・解釈	13.2 統合・解釈	正答率	55.2%	57.1%	50.8%	33.2%
	2000 年	2009 年																										
連 続 型	65.0%	63.7%																										
非連続型	70.0%	64.4%																										
2000 年	2003 年	2006 年	2009 年																									
67.1%	65.3%	63.3%	63.1%																									
プロセス	1.1情報の取り出し	1.2 統合・解釈	4.3 統合・解釈	13.2 統合・解釈																								
正答率	55.2%	57.1%	50.8%	33.2%																								
II 研究の方法	本研究では、児童・生徒が非連続型テキストの効果を捉え、連続型テキストに書かれている内容と合っているのか考え、連続型テキストの内容を理解するために適した非連続型テキストを選ぶことができることを目的に授業研究を中心に検証を行った。 (1) 方法 授業研究 (2) 対象 八王子市立A学校 第4学年 10名 (3) 実施時期 平成25年11月 (4) 授業時数 3時間 (5) 検証資料 ①プレ調査 ②要旨 ③授業観察 ④記録分析(ワークシート、音声記録、ビデオ) ポスト調査 検証授業では、児童の活動を3段階設定した。 第1段階として、既習教材を分類し、非連続型テキストの効果について捉えさせた。第2段階として、非連続型テキストを除いた連続型テキストを読み、不明瞭な情報を取り出す活動を設定した。また、不明瞭な部分にどのような非																											

	連続型テキストがあれば分かりやすくなるか個人で考えさせた。第3段階では、不明瞭な部分に非連続型テキストを取り入れることで、どのようなことが明らかになるのか考えさせた。その後、必要な非連続型テキストの種類について、考えたことや叙述を基に児童相互の検討を通して、連続型テキストの内容に適した非連続型テキストを確定させる活動を設定した。 この3つの活動の様子をプロトコルでおこし、分析を行うことで、理解にどのように影響したかを確認する。また、ワークシートへの記述内容等から児童の学習の様子や理解の深まりについて確認する。 検証授業の前後で、連続型テキストから取り出した情報を基に非連続型テキストに表す調査を行い、その結果を比較し、一連の学習プロセスが混成型テキストの統合的な読みが形成されたか検証した。
Ⅲ 研究の結果	1 非連続型テキストの種類とその効果についての習得 非連続型テキストと連続型テキストと照らし合わせながら読み進めていく中で、学習者の発話から非連続型テキストのもつ効果について意見の交流を通して、気づきにつながる発話が見られた。汎用性のある言葉でまとめることはできないまでも、学習者に非連続型テキストの効果に対するスキーマを与える学習活動になりうることを確認された。 2 連続型テキストからの情報の取り出し及び非連続型テキストの必要性 分析から、学習者が連続型テキストのみを示された際に、非連続型テキストや注釈等の情報を求めていることが明らかとなった。これは、連続型テキストをクリティカルに読み進める視点を与えるものとなる。連続型テキストの不明確な部分を焦点化した読みを進めているが、マクロな視点からテキストを分析して、必要な情報に着目したものとは言い難い。学習者の関心に沿った読みに依存していると捉えることもできる。しかし、未習の内容に着目した発話が多く学習者から出たことは、テキストに正対した読みにつながっていると言えることができる。他の情報を取り入れることで明らかにするという可能性に気付いた上で、連続型テキストから不明確な部分を取り出すことで読みを促すことができた。

	3 連続型テキストに必要な非連続型テキストの作成・選択 未習の内容について非連続型テキストに表す際に、連続型テキストの中から内容を表現するために幾つかのセンテンスを関連付け、非連続型テキストに統合する姿が見られた。第1時での学習で、比較するという観点から、非連続型テキスト（写真）の効果について習得したものを活用したものと考えられる。また、基準点を合わせるという観点においては、本研究内では大きく取り扱っていないものの、算数などの他教科の学習が反映されたものと捉えることができる。連続型テキストの内容を非連続型テキストで表す際に、様々な要素を統合して表現しようとする思考につながったと考えられる。 また、テキストの内容に合った非連続型テキストを選択する際にも、プレ調査で行った結果を分類した視点を踏まえた発話が見られた。このことから、同じ題材を扱った非連続型テキストでも、テキストの内容や読み手のことを考えて表現しようとする視点を与えることができたと言える。 ○ ポスト調査 連続型テキストを非連続型テキストに再構成する調査を行い、10名のうち、全員が図解を加え、いずれも何らかの形で非連続テキストをくわしくするとともに、連続テキストを注解として組み合わせることを考えており、複合テキストの形を強く意識している結果が得られた。
IV 考察	本研究において設定した連続型テキストと非連続型テキストの統合を柱に置いた授業デザインを行っていく際、非連続型テキストのもつ効果や読解の方策について児童に意識させることが前提となる。国語科のみならず、日常生活及び他教科の指導において非連続型テキストの読み解きを推進することで形成されたスキーマを用いることで国語科での読解につながる。多くの学習機会を通してその有意性と特性を理解させることで、学習者の非連続型テキストについて分析的に見るための選択肢が増えてくる可能性も考えられる。また、国語科における説明的な文章の指導における他教科との融合で得られる分析的視点の広がりも考えられる。今後、連続型テキストで示された情報と非連続型テキストで示された情報の適合性について判断するといった、非連続型テキストによって与えられたスキーマをもって連続型テキストを的確に読むための指導の在り方についても検証し、混成型テキストにおいて、統合的に読みを形成する学習過程の形を更に模索していく必要があると考えている。